

ガラスの中の眩き

Lyrics 3

渚
言址

眺望

丘の上に薄い日射しが降り注ぎ
思い出から香りを全て洗い流す

既に久しく囁く者はなく
通り過ぎゆくのみ

草の中に寝転がれば
背中にはこそばゆい自然の息吹き

無感覚に等しい心の中に
知らず知らずのうちに盛り上がる、これは何者か

全ては無質量から成り立つと知れば
何故この世に苦悩のあるものぞ

ましてや全ては場の歪みより成ると知れば
何故苦悩と歓喜の区別のあるものぞ

ふと己が左の手首を見やれば
か弱くも正確な血の脈動

そして立ち上がり、ぐるりを見渡せば
あちこちに、ぼつりぼつりと人の歩む姿

ああ、所詮は相対的でしかなかった
全ては全ての一部であったのだ

既にして己が存在は消滅し
境界を引くことは不可能だ

私の髪をなぶる風・・・
いや、その風さえも私の一部なのだ

衣をまとうことも脱ぎ捨てることもないだろう
この大気こそが私の衣であるのだから！

(1990.1.13)

保守

コマーシャルイズムに塗りたくられた平和が
重い足取りで唾を吐きながら夢見るものは

およそ爪先に広がる社会とは似ても似つかぬ混沌
酒でも入らねば進むに重苦しく

頭痛でもしなれば考えるに辛い
何故そんなものを夢見ることか

重いコートの胸元かき寄せて

庶民という名で己を呼び慣らし

「生きる術」とは見上げた根性よ

100歩先まで読みすかし

その先見性には全くのところ恐れ入る
己を押し潰すことさえいとわぬとは！

春の息吹が最初に訪れる時

僕は耳を澄ますだろう

ただ己を香りの中に溺れさせる為だけに・・・
全ゆる事実を是認するのみの寛容なら

酔いしれるがいい

このなま温かい淀みの中に！

感応にも等しかったあの大気は冷えきり

ただ、物質としての

存在としての物質が浮遊する

ああ、今ここに平坦さ以外の何があるう！

壁はいたる所で取り払われるが

生活と感情とは互いに隔離されるばかりだ

若者は手足を伸ばすためにカリスマの庇護を求め

中年共は己の築き上げたものから疑念を拭き取ることにやっきとなり

しょぼくれた老人達は水気のなくなった生命を持って余す

ああ、いっそ消え去るがいい

幸福も悲劇もない単調さの中へ！

平面の中に描かれた痕跡として・・・

(1990.2.20)

浅い春

今や「生きる」ことを生きることかなわず
浮ぶ雲には祈りさえなく
丘の斜面に寝転がりながら
僕には歌があるばかりだった

神が人となって幾久しく
既にして偶然是数式となっていた
そして残ったものは
人間以外の何があるう・・・

草々は風にその存在を流されるに任せ
大地の起伏は眠りの中に伝説を夢見る
私は耳を澄ます
滅びることを願う魂の呟きに

この目の前に白く輝く青い海・・・
そこには幾分かの後悔を流すことはできる
けれども誤解に満ちた哀しみは

決して浮き上がることはない

癒されることはあっても立ち去れはしない

忘れることはあっても捨て去れはしない

ならばまた探しにでも行こうか

あの埃っぽい白く乾いた道をたどって

(1990.3.18)

日傘

風は清かったが陽射しは強かった

舗道には自由の影が散らばっていた

日傘の下の女は思いもかけず美しく

僕は想ったものだ、言葉の無力について

力は常に弱さの漂うところへと襲いかかるもの

何故なら

それが自然というものの

そして運命というものの「効率の論理」なのだから

おお、自由よ

御前は常に強大な庇護の下にのみ生きる

ならば何故に御前を

僕達は自由と呼ぶのか！

僕が知らずに足を速めたその時

彼女の右手の指の動きひとつで

日傘はくるりと回った

それは丁度、擦れ違いざまだった

もしかしたらこの時

僕は泣いていたのかもしれないなかった

せめて己自身の生命ぐらい

自分自身で背負いたいものだ

(1990.6.10)

生への逃避行

少しばかりの胸苦しさをさえも
身にまとうことを拒んでしまい、また
それはいともたやすく許される

耐えきれぬ苦しきならば

毒抜きをしてから服用すればよく、また
逃げ道はいともたやすく見つけることができる

感性を養うためにさえ訓練を要し
拾い上げるとは困難に近く
栽培するしかない

「私」の地平には怖れも、慰めも
魅惑も、また幻滅もなく
つまり、語るべき何ものもない

捜すなどは無駄骨に等しい、何故なら
結局それは造ることであり、則ち

既に「私」が地平に立っていることを意味するのだ

もしも私に今、出来ることがあるとすれば

恐らく——、それは

棄てること、これひとつだろう

それは恐ろしいことだった

棄てること——

これ以上に今の私にとって恐ろしいものはない

考えただけで鳥肌が立つその言葉

ああ、何故そうまでしなければ

地平は生命を持たないのだろうか

生活から転がり落ちさえすればいいのだ

ちよつと遠くへ逃げればいいだけなのだ

そうすれば誰も追いつけないのだ

永久に戻らないことも可能なのだ

そうすれば己を生きることができなのだ

生きることができなのだ

(1990.7.14)

湖面

黄泉の国の湖に棹さして

僕は進んでいった

それは義務であるかに思われた

つまり、目的のない義務に・・・

だが僕は目を凝らしていた

舳先が背の高い葦をかき分ける度に

さも何かを待ち受けているかの如く

息をこらして見つめていた

この国では陽光はぼんやりと薄められ

影は限りなく透明に近かった

半ば靄で飽和した大気に

陽光の大半は吸い込まれてしまうのだ

既に舟を浮かべて10日が過ぎたが

見えるものは間近の葦ばかりで

視界は常に手の届く範囲に限られ

僕は狭い湖の中をどうどうめぐりしているようにも思われた

それはなぜか孤独ではなかった

ああ、何という涼しさだったろう

このような義務に明け暮れるというのは

ああ、何と清々しいことだったろう

葉擦れの音は決して単調ではなく

限られた視界の奥には

常に何かの気配がひそみ

僕は心を張りつめて棹さしていった

岸に近づいているのかいないのか

それは全く分からなかった

しかし水面は続いていた

これが地面だったら僕は焦燥に胸をかきむしっただろう

僕はゆっくりと進んでいった
黄泉の国の薄い陽光の中を
それは義務であるかに思われた
つまり、目的のない義務に・・・

(1991.5.20)

空洞

美しかったのは雲だった
夏の雲だった

僕はぼつねんとホームに立っていた
誰も僕に目を向けはしなかった

うち捨てられた淋しさというものを
僕は今、初めて感じていた

かつては、孤独の中に居てさえ
他人に助けを求めたいと思ったことなどなかったのに

孤独という奴に、僕は棄てられたのだ
いや、僕が棄てたのだ

そう、僕の中に僕の居場所はない
そして、僕が切望し、実現したこの世界の中にも・・・

「求めよ、さらば与えられん」
その但し書きを僕は読んではいなかったのだ

それは夏の雲だった
僕はホームに棄てられていた

(1991.6.5)

秘儀

相応しからぬ者として

月は我に語らず

都は人々を娯しまするに余りある程なるが故に・・・

我、かつて月を忘れたり

埃にまみれたる扇を今し拈げれど

おぼろ雲さえ招き寄せることかなわす

まして

眠りは既に眠りの為にあらず

ただ明日への義務となり果てり

既にして血は淀み

むしろ流れ出んことを希うものなり

その時こそ

赤く月は染まり

我に語り出すであらう

かの跳躍に満ち満ちた言葉により

静のうちにある動を

動のうちにある静を

(1991.6.10)

唾と蠅

呆れ返るほどの文化の我物顔に
僕は唾を吐きかけたくなったのです

ところがその唾にもまた

庶民共が我先にとたかってくるからたまらない

それ故に僕は常に追われる身

こんな奴らに追い越されたらたまらんと

取るものも取り敢えず梯子を架ける——

こんなざまでは不良品ばかりが積み上がるに決まっているし
まともな建築なんてできやしないのだ

彼らは加工をもって創造と称し

分解と破壊をもって理解と称する

我々が生み出すものは、したがって
たちまちのうちに破壊を経て加工され

それのみならまだしも

全く別のものとして残り、珍重される

どうせなら、そのまま最初の姿で葬り去りたいものだが
吐いた唾まで舐められるようでは

それもかなわぬことと諦めるしかないらしい

(1991.6.15)

追尾

誰もが空間の隙間を埋め尽くそうとしてきた
隙間というものは常に不安なものだから

そしてエントロピーの秘密を最後の一滴まで搾り出そうとしてきた
つまり、エントロピーが保存を妨げるものだから

ところが、限定と拡大とは同一であった
そこは何処かで連結しているらしかった

誰もが薄々感づいていることだ
つまり、永遠が静止の中にはなく、追跡の中にのみ在るものだ

この不条理に唾をくれることのできる奴が居たら御目にかかりたいものだ
それこそ神そのものに違いない！

それなのに未だ生きて在る人間共の
ああ、何といじらしいことよ

いや、そもそも生きて在ることも
それを捨てることも無意味だったという訳だ

おめでたいと言えばそれまでだ
せいぜい飲み干してやるとも

(1991.6.21)

作法

社会性とかいうものを有難く学んで以来

世界は開かれていた

いや、これほどに開かれたものとなるとは！

何処までも透明でしかも無意味だ

こいつら愚鈍の者達に

俺は少し謹み深すぎたらしい

たとえ空缶を蹴飛ばしたところで

何も溢れ出てきやしないのだ

かつて俺は己の創造物に囲まれていた

その時の、ああ、何という謎めいた色彩であったことか！

ところが今や外界の全ては明らかとなってしまった

その代わりに閉ざされたものが実は無窮のものだったのだ

憧れとは正しくこうしたものだ

創造は乗数効果をもつが

憧れとは単なる足し算でしかない

しかも新たな対象はマイナス項を含む

何の義理があつて俺は口を慎んでいるのか

偶然を怖れるが故か

それとも単なる忘却の故か

ああ、そんな作法など捨ててしまふがいい

(1991.6.22)

秘儀

彼女は尻を振ってみせた

それは哀しげな舞踏であつた

暗い部屋にはパイプ造りのベッドだけが

私はその上で彼女に突き刺した

初めて煙草を吸ったときのやうに

私の頭の中は次第に歪んでいった

モザイク作りの彼女の顔には

今や苦悩の秩序は存在せず

あるのは、ただ

月が投げかけた死の静寂だけだった

この海の上に浮ぶ廃都に

彼女が刻み込みみたかったものを、私は知っている

それは、この儀式の最期であった

愛に汚れされたこの儀式の最期であった

私は定められたリズムを守り

彼女の中にこの秘儀を眠らせていった

そして・・・

私はナイフを突き立てたのだった

彼女の乳房の下に

(1991.6.24)

海流

時折り棹さして方向を見定めつつ

僕は流れに乗って悠々と流れ下っていった

「ああ、僕はこうして老いてゆくのだ」と

感慨深げに空を見上げながら・・・

流れに手を浸すのは心地よいことだった

ああ、何とゆったりした時の流れよ

ああ、何と豊かで優しい生活の流れよ

そして、私と同じように舟で下る人々は

幸福な微笑と共に僕に近づき、また離れ

そしてまた近づいてくる

僕はその度に舟と船を繋ぎ

彼らと酒を酌み交すのが好きだ

ああ、何と世界は優美なものか！

ただ、時折いくつかの例外に出会うこともあった

恋に狂う若者が流れをさかのぼろうと

恋人を見失うまいと無益に流れに逆らって棹さしていたり

運命の悪戯か、はしゃぎ過ぎかで転覆してしまった者たちが

水をたらふく飲みながら助けを乞う手を伸ばしていたり

ああ、しかしそれらはただ過ぎてゆくだけだった

僕の舟は順調に流れていた・・・

その時——

僕はふと恐怖に襲われたのだ

この流れの果てに、やはり悠久の時の流れがあるのだろうか、と

僕は落ち着かず、舟の上を行ったり来たりした

なおも流れは僕を運んでいた

僕の意思とは何の関わりもなく・・・

辺りを見回しても陸は見えなかった

大海そのものが流れていた

ふと見ると、またもや流れに逆らって棹さす者が居た

その舟は飛ぶように過ぎていった

速度は増していた——

今や計り知れぬほどに・・・

僕は気が付くと、棹を水底に突き刺していた

舟の舳先に、泡立ちながら流れはぶつかっていた

数度の失敗を繰り返したのち

僕は流れの中に停止していた

無数の哀しげな微笑が飛び過ぎていった

幸福という名の舟に乗って・・・

見上げる空には何も変わりはなかった

陽光は、流れと共に下っているときと同じく優しかった

ただ、風が少し強く感じられたことと

流れのざわめきと力の強さが僕を威嚇した以外には何も変わりはなかった

変わっていたのは流れの上の景色だった

全ては飛ぶように過ぎていった

それは、ある時は僕の焦燥をかき立てた

取り残されたという孤独感をも

だが、ある者は僕に瑞々しいオレンジを投げてくれた

また、ある者は数日僕の舟に係留したりした

そんな時は、何にも増して素晴らしかった

彼らが何処へ行くのかは、既にどうでもよくなっていた

尤も、殆どの者が投げて寄越すのは

優越感、哀れみ、幸福への誘惑といった類だった

そしてまた、僕は流れに棹さしはじめた

ただし、今度は流れに逆らって棹さしていた
それは、彼らが見たという陸の話に刺戟されたためかもしれなかったし
流れの果てにあるものに対する恐怖の故かもしれないかった

ああ、それにしても何と世界は違っていただろう！

流れに身を任せていた時の世界とは・・・

今や、僕の胸の中には希望がふくらんでいた

流れの果てを想うのと同じほど空しいことかもしれないというのに・・・

そして、もしかしたら――

僕は生そのものをも拒否したことになるのかもしれないというのに・・・

それでも、今や支配するものとなっていたことは確かだった

この流れを

そして、この世界を

(1991.6.28)

シヨーンガウアー讃

神は未だ恐怖にて在り

死の硬直は赤兎にさえ狂気を呼び覚まし

右手に法印を結ばせる

即物から今、解き放たれようとする視線は

腐乱の先に無の奈落を避けるが故に

復活の幻想も未だ腐臭をまぬがれない

どうせなら見目美しき若者として蘇らせればよいものを

何と、神の姿はゾンビそのもの

御丁寧に、傷口からは粘っこい体液さえ垂れ流している

皮膚はゴムの如くに生ける死体を包み

十字架の傷口の周りでは生々しく盛り上がっている

おお、しかしよく見ればここにはヒューマニズムの開花があるではないか！

肉は肉として意識され

閉ざされていた肉欲は遂に精神へと投じられ

ああ、再び目は葛藤の中に見開かれたのだ
神より解き放たれようがため・・・

(1991.7.16)

19才

彼女はソファに身を横たえながら言った
肉付きのよい太ももをあらわにしながら
「低俗よ」と

部屋には汗の匂いが満ち満ち
僕は吐き気をもよおしていた
営みというものに

彼女の微笑には侮蔑が含まれていた
この僕の指先で干からびた陶酔を
彼女はその微笑によって刺青とした

外に飛び出して夜気を何度吸い込んでも
内臓が口から飛び出しそうな気がして
冷や汗が次々に噴出して頬を流れていった

既に生を絶つことも不可能だった
全ては遅すぎたのだ

ああ、どうして今更、生の所有権を主張できよう

僕には笑うことだけが許された
それにさえ条件が付されていた

「大声で」という・・・

(1992.1.19)

親和力

扉を叩いても叩いても

己が魂の中に押し入ること叶わず

その間にも絶え間なく

僕の襟首をつかんで引く者は引きもきらず

ああ、忘却を強いる者は時間に非ず

傷付くことを許されず

嘲笑にさえも見放されるとあらば

生活への活力にしか身を投ずる場はなく

そのコロッセオに充ちた冷ややかな微笑は

我が成功をもって満ち足りんと欲する

異質なものは次々と奪い去られ

ただ同化へと継ぎ接ぎされるうち

まがりなりにも、僕は確かに「人」となったらしい

それはもしかしたら人々の信仰であったかもしれない

つまり、己を肯定しようとする――

今や朽ち果てた目を見開いて力をふりしぼり

僕は浅はかにも市井の者達に唾を吐きかけた

しかし烏合の衆は数に物言わせ、僕を組み伏せた

ああ、その力はいかにも強過ぎた

継ぎ接ぎだらけのこの僕には・・・

(1992.2.3)

暗い階段を下りてゆくと

そこには酒樽が数多置かれてあった

それを飲むとどうなるかを僕は知っていた

階段を見上げると陽光が明るかった

しかしそれはここから見上げるが故であった

僕はあそこから下りて来たのだ

かつて陽光は憧れであった

そしてそれは現在には幻滅に他ならなかった

僕が夢見ていた陽光はあの上にはなく

ただあったのは陽光の色をした世界であった

ああ今こそこの酒樽の栓を開く時だ

ランプに灯を入れると

闇は僕をそそのかすが如くに後ずさりし

僕は思わず出口を見上げた

そこを上り出れば再びここへは戻れず

この目の前の栓を抜けば

再び上ることはかなうまいと思われた

生きて在る証しを人々は求めず

ただ生活に棹さして流れ行く様から

僕は高貴な香りを嗅ごうと努めた――

だがそれは果てなき中和の連続だった

ああ、それでこの心が安らぎを覚えたなら

僕は今ここになど立ってはいまい

鼻孔を刺す香りのある木の栓に手をかけると

さすがにためらう心が震えを帯びたが

僕は2度、3度とかぶりを振った、そして

何者も僕に絶望を与えることはできない

それはこの樽にしたところで望むべくもないのだ、と

震える心に諦めを囁いた

栓が抜かれた樽の口から透明な液体が

置いてあったグラスを満たすと

僕は喜びとも諦めともつかぬ息を吐いた

全てはこれで決定的となるのだ

地下生活者としての人生が、これからは
少なくとも僕に震えを与え続けるのだ

力の抜けた右手でグラスを取り

もはや何のためらいもなくそれを口にすると

おお、何ということか！

それはおよそ酒などとは似ても似つかぬ代物だった

胸焼けのするような酸の敗残物だった

これは階上の世界での僕そのものではないか！

血眼になって全ての栓を抜いても

どれもみな同じだった

ああ、既に扉は閉ざされてあったのだ

膝を折った僕の口には知らず知らず

微笑が浮かんでいた

いずれにせよ決定が下されたのには違いないではないか

僕は何者も絶望を与えてくれはしないと知っていた

階段を上るのは決して気の重いことではなかった

あの世界がこのむかむかする胸焼けを再び中和してくれるのだ

僕は生き続けるだろう
幻滅という生を生き続けるだろう
震えることもなく
堂々と生き続けるだろう・・・

(1992.2.8)

雪野原

雪雲さえ貫いて
私の許に届く淡い陽光

おお、生ある者は全て
お前によって穿たれ、儂きものとなる

だが冬こそはうつろいの凍る季節
私の放浪の季節

貪欲なるものは己が中に閉じこもり

降り積もるものはただ白、また白

静寂にふるえ戦く心がもがき

仮面を脱ぎ棄てて壁に縋る

陽光よ、見るがいい

お前の包んでいた世界の裸の姿を

これこそが私の抱き上げる者達なのだ

お前を神と頼む者達なのだ

(1992.2.13)

福音

死を喪失した時

羞恥に取り囲まれ

創造を重ねる

生は永遠なるものなれば
守られるべきものではなく
無限に拡大する

果てしなく続くと知られた生活も
揺らめく心は無機化するに足らず
豊饒に豊饒を重ねる

パンドラの箱は閉じられることなく
揺らめく心は放浪う
かき立てられ続ける焦燥に突き動かされて

争いは無論絶えることなく
生の空しさも変わることなく浮遊し
希望もまた絶えることはない

かつて生を規定するものは死であったが
死を喪失した今、それを規定するものは
それは羞恥である

限りなくその姿を変えてゆくその者こそは
この生を魅力あるものとする欲望の源泉
神の与えたもうた最大の賜りもの

死を救いと頼む者は私に従属するがいい
そして知るがいい

何者も絶望を与えてくれはしないことを

今や死こそは弱者の福音となったのだ
神に祈るしか術のないものとなったのだ
かつて平等の源泉であった死こそは！

(1992.2.20)

痕跡

ふるえを知る者には

生を逃亡の中に駆け抜けることはできない
たとえ俯いたまま歩こうとも

怖れの故に身を寄せ合うものは少なく
嘘を創造するために産み出した美辞麗句には
ああ、何と蟻の如く人々はたかることか

静謐の中にこの指輪を贈るとき

かすかな想いは生活によって——
ああ、どこへ消え去るものか

人々は街に蹴りを与え

街は風を拒み

風は人々を無視して通り過ぎる

ひっそりと僕の肩を抱いていた旋律は
白日の下に引きずり出され、無残にも
原色の絵具で塗りたくられてしまった

小さな自転車に窮屈にまたがると

空は心なしか高く見え

道のりは果てしなく、そして期待に満ちていた

僕は慄えながら感じていた

この小さな世界にも無数の空間があり
駆け抜けることのできぬ果てしなさがあると

人々は己を押し込めるべく努力を重ねていた

則ち自ら造り出した純粹な成分のみの世界へと

息苦しさに喘ぎながら・・・

則ち自己保存という息苦しさに

逃亡に逃亡を重ねながら・・・

則ち被造物たる自身からの逃亡を図るために

このアスファルトの道にも

この新しいデザインの家々にも

このいかつい鉄骨造りの駅にも

既に染み込んではいなかったろうか

無数の喘ぎと逃亡の疲労が

あの弱弱しいふるえに満ちた眩きが

ああ世界よ

僕にだけは
そう——、僕にだけは血を流すがいい
怖れという血を
流すがいい

(1992.9.14)

フォルクローレ

花が
小さな花が散らばっていた
風は
まどろんでいた

聞こえるのです
微風の囁きの中に
花々の口ずさむ歌の中に
人々のフォルクローレの中に

浮かんでは消える

かすかな愛

たなびく哀しみ

そしてぼんやりとこみ上げるもの

言葉がにじみ出ようとしている

生まれようとしている

音楽として

慄えとして

僕は

待ち続けた

誕生の時を

最初の息吹を

目をそむけたくなるような

黒ずんだ醜さと

野蛮なダミ声とを持って

それは生まれた

ところが、彼の最初の一步は
やがて小さな行進となり

森の中を抜けた時には
生きとし生ける者達を引き連れていた

僕には不可解だった

彼がフォルクローレを歌う姿が
そして

全ての感情を引き寄せる魔力を

いやらしい哄笑と

破廉恥極まりない仕草

そして、それに呼応するのは
ああ、これは生命ではないか

その手が茎に触れると

花は愉悦に慄え

その歌がこだますると

動物達は欲望に身体をうずかせた

こいつを生み出したのは僕じゃない
大気なのだ

愛が浮遊する大気
哀しみが浮遊する大気なのだ

僕は叫ぼうとしていた
ありったけの毒を盛って

「去れ、詩神よ！」

(・・・)

花が
小さな花が散らばっていた
風は
まどろんでいた

聞こえるのです
微風の囁きの中に
花々の口ずさむ歌の中に

人々のフォルクローレの中に

「もう一度、

もう一度生まれてきてはくれまいか・・・。」と

(1994.1.15)

神人

打ちのめされながら死へと妥協してゆく

ああ、しかし何者が何のために打ちのめすのか

街を埋め尽くす微笑の列

この仮面をはがして口づけする勇氣は残っているのだろうか

これほどに僕をあざ笑う生とは何者か

そんなものはいっそ幻想だと決めてやろう

そのとき、微笑は一斉に怒りと化した

ああ、生とは君たちの抱きしめているもの
生活や、健康や、それらの中にあるエキス

そのくせそれだけじゃ不満で
強壯剤なしじゃあまりに平坦すぎると

つまり、そういうことですね
ならば微笑をお続けください

打ちのめし合うもよし

妥協をし合うもよし

さて、僕も微笑するでしょう

(1996.12.12)

午前3時

午前3時

吹雪いていた・・・

街灯に照らされた僕は

誰ひとり歩く者なく

幻想は何ひとつ生まれず

眠りの中に閉じこもり

涙をとめどなく流し

孤独などどこにも存在しない

今の僕には

全ゆる音は吸い込まれ

この想いこそ届くがいい

全てを包むことができるのは、今のところ

御前だけだ

振り返れば足跡は半ば消えかかり

盲目となる時に浮かぶものこそ
全ゆる不安の源泉に違いあるまい

憩いの中に在る者達へ

(1994.1.31)

正午

襟元を暖める陽光は
うづくまる感情を遠い想いへと誘い
テーブルの上に鮮やかに落ちた影の中で
ひっそりと遊び戯れているのは
あれは飽くことを知らぬ者たちだ

それを見つめる僕は

ただ無為に朽ち果てることを希っている

ああ、これ以上の何が要ろう

これ以上の何を生きよう

感じるものが僕の生であるなら

影は少しだけ動いていた

僕は思わず時計を見上げていた

明日、未来、ああ時間だ

僕を追い立てるものは何だ

生活か、それとも時間か

音楽は、詩は、そして陽光は

それら僕に迫る追手からの逃走を

ほんのちよっと手助けしてくれる――――

それだけのものなら

ああ、そんなものは無意味だ

影はもうあんなにも動いている

そしてその中にはもう何もいない

部屋中ひっくり返して捜し回っても

何かをしなければ
何かを産み出さなければ
皆、生きている・・・

生きている——

僕の生

感じることに

朽ち果てること・・・

(1997.1.13)

幼虫

襟元黄緑色をした幼虫は
濃いみどりの一葉に居て
風に揺れていた

木漏れ日が囁き

その模様を時折り白く輝かせた
ひっそりと

彼はただ独りここで
生きてきた、しかも
置き去りにされて

親の顔など見たこともなく
友達もなく
声もなく

その黒い目に
僕はそっと押しつけた
オレンジ色に光る煙草を

彼は苦悶に身をよじり
哀しげな目を向け
事切れた・・・

ああ、これ以上の何を生きよう

この陽光の瞬きが
いかに自由をうたおうと
いかに肩を抱いてくれようと

(1999.6.1)

ラクリマ

こと切れた君の頭を抱いて
僕は野に涙した

苦悶とも

恍惚とも見える君の表情は
ああ、神そのものだった

誰ひとり出会わず

僕たちは荒れ野をさまよい
何年が過ぎていたろう

衣に泣き縋る妻と子を振り切り
君は僕とともに来てしまった
与えることのない毎日へと

僕たちの間に友情などはなく
助け合うこともなく
ただひたすらに与えられることだけを想っていた

小川のせせらぎから
陽光と影から
大気の哀しみから

そして今、君はこと切れたのだ
僕は君を埋めるつもりはない

そして僕は
来た道を引き返した
君を野ざらしにして

(1999.7.12)

ポリフォニー

薄れゆく意識の中

何層もの透明なヴェールの

重なり合い、微風にそよぐように

次々と浮かんでは消える陽光と大気

ひと、かぜ、まち

幼い僕の手を引く父の

自信に満ちた歩みと夏の太陽は

ひどく威圧的だったが、同時に

守り神のようにも思われた

ひと、かぜ、まち

校舎の屋上から見渡して探したものは

口やかましくまとわりつく自分の街なんかではなく

人ひとり居ない荒野と静かな大河

そして寝台つきの一艘のヨットだった

ひと、かぜ、まち

膨大な視線が素通りしてゆくのを

僕は呆然として眺めるばかりだった

肩が触れ合わんばかりの人の渦の中で

あらゆる人々が孤独にうつむいていた

ひと、かぜ、まち

ほんの少し肩を抱くだけでいい、と

彼女が陽光に手をかざしてみせたとき

様々な色彩の感情が大気に溶けていることを

僕は刺すような胸の痛みとともに初めて感じた

ひと、かぜ、まち

歩いて、歩いて、歩きさまよい

受けとめ、抱き上げ、

涙として、微笑として返しながら

僕はいつしか呟いていた

ひと、かぜ、まち

赤子を抱き上げる若い母親

子供達のさざめき

頬を寄せ合う恋人達

胸を張って歩く男たち

ひと、かぜ、まち

酔いつぶれた女たち

ホームにぼつりと佇む老人

笑い、うそぶく若者たち

父に怒鳴られて、うなだれる子供

ひと、かぜ、まち

薄れゆく意識の中

僕は呟いていた——

ひと、かぜ、まち

(1999.8.10)

狐

降り積もる落葉の上で

狐が飛び跳ねる

カサツ、コソツ

その中には何が潜んでいるのか

光を反射するものか

それとも鼓動するものか

いや、そこには何も埋もれてはいない

枯葉だけです

ただの枯葉の山です

そんなものを

誰がそこに仕掛けたのか

素知らぬ顔をしたあの木でしようか

狐がそつと触れると

音がする

カサツ、コソツ

でも何が潜んでいるのか分らない

ただ枯葉しかない

枯葉しかない

(1999.9.13)

湖上にて

「自由」のはしやぎ回る岸辺から

漕ぎ出す風は優しく

僕の肩をそつと愛撫する

次第に遠ざかる岸边からは
華やぐ声の切れ端が時折聞こえる
ああ、何て楽しかった日々

それに比べてこの湖面の静寂は
何と広く、そして淋しかったろう
しかも、何と美しかったろう

オールを引き上げて僕は
冷たい水をすくってみる
ああ、ここには抱擁がある

湖面に映り、揺れる陽光も
掌にすくい上げてみる
ああ、ここには哀しみがある

ここではすすり泣くことも、そして
祈ることも自由だった
あの岸边で許されぬ全てが

後ろ髪を引かれはしても
二度と戻ることはないと分かっていた
戻れないと分かっていた

(1999.9.6)

帰郷

霧のような雨が
笛の音に滴を加える

この木陰は濡れていない

ひりりとしたミントの茂みを
僕はひとさし指でかき回す

少しひんやりとした空気

明日には郷里へと着くだろう

人ひとり残っていない地名だけの場所へ

ふくらはぎを揉みほぐす

きっともうすぐ日が暮れるだろう
今夜はここで寝もう

リュックの中を探る

ああ、この時を迎えられなかった者達
僕を置いて逝ってしまった者達
彼らの残した宝石のような憧れが
この掌の中に記されている
この数冊の本の中に・・・

明日は君達を届ける事ができる

僕はそれを埋める

そして笛を吹こう

途切れていた旋律を

(1999.9.16)

悲愴

この掌に握りしめた土くれにこそ
おお、僕はくちづけける

ここが舞台だ
死の舞踏の

逃亡に次ぐ逃亡の果て

辿り着いたところは——

ここで死んでしまおう

眠ろう、ただ眠りたい・・・

愛した人々よ

どうか哀れんでください

感情に、生活に、そして幸福に

押しつぶされたこの僕を

ナイフを執り

足首をすいと切ると

少しずつ

にじみ出す生命

(さあ、踊ろう)

聞こえる

初めて聞いたあなたの声が

そして母の音が

ああ、単調な生活にも愛が必要だと

あなた方は教えてくれた

感じる

人々の哄笑に潜む孤独と怯えを

風に抗うと見えてすすり泣く心を

ああ、生とは無作為なもの

そして重く、愛しいもの！

ああ、僕の幸福は成就される

この舞踏によって

涙よ、とめどなく溢れ

流れきってしまえ

この生が終わる前に

(意識が薄れてゆく)

大地よ

僕がここに眠ることを許しておくれ

ここに土となることを

許しておくれ

許しておくれ

(1999.9.20)

ガラスの中の眩き

うす青いガラス細工の中に

凍りついた眩きがうずくまる

(私は深い眠りにつく者

この眠りを覚ますことができるのは

ただひとりだけ)

私はそのガラスを磨く

そのひとりが私であれかし、と

ほんのかすかな囁きも聞き漏らすまい
どんな小さな微笑も見逃すまい

お前を目覚めさせる鍵は何？

日の光の当たる角度か

それとも或旋律か

それともお前を包む掌の感触か

それともお前にキスする唇か

それとも愛しんだ年月の長さか

せめてヒントのひとつなりを囁いてくれ

ガラスの中に潜むその眩きを

美しく花開かせることができるならば

ああ、この凍りついたペンも溶けだし

再び走り出すような気がするのだ

私は磨き続ける

ガラスよ溶け去れ

お前の言う

「ただひとり」であれかし、と

(1999.12.26)

航跡

岸壁にとまる「羽」の鳥は

潮に乗って運河を上る魚を狙う

ぼんやりとした姿を浮かべて

停泊している貨物船を迎えに

タグボートは、ゆるやかな航跡を残す

午前の光はまるで

海面から立ち昇る水蒸気のように充滿し

大気と水面との境界を判然とさせず
全ては同じ粒子でできているかに見える

ゆっくりとそぞろ歩く人々は
自らの想いまでもそこへと溶かし
もはや存在さえ無意味と為す

(その時、鳥はふいと羽ばたき上がり
海面の一点へとすばやく舞い下り
音も立てずに魚をとらえる)

タグボートの航跡は
さっきまでリボンだったものが
今は、川かと思われるほどに広がっている

いずれはそれも消えゆくものか
それとも、永遠にさざなみとして
残るものか
在り続けるものか

(1999.12.30)

反故

大木にからまる蔓草に連なる枯葉は
冷たい微風にゆらゆらと揺れ

実験室に独り居る僕を

ゆっくと

しかし、確かな力強さで引いてゆく
喪失の怖れへと

再び春が訪れようとして

陽光の粒子がうち騒ぎ

遙か彼方の眺望を点描とするとき

僕は、自らの意思で呼吸する

北風が残した温もりと

東風が運びつつある哀しい幸福とを

次第次第に強まる乾ききった風は

埃を巻き上げながら

貧困にあえぐ翼をとらえ

僕を押し込めようとする

背走と仮死、そして焦燥へと
色彩の失せた言葉の連なりへと

僕はかろうじてヴァイオリンを手にしたが

ありったけのヴィブラートをかけ

典雅な曲想を台無しにした

そして、弾き終えて後、

まるで呆けたように

そこらじゅうに散らばった破片を拾い集めていた

(2000.2.16)

薄い紺

あるべきところに

水の流れ

あるかなきかの

空の雲

かの呟きは誰にも届かず
ただ

その音色のみ
大気に溶ける

日々の暮らしが
何気ないほど
深く沈んでゆく
揺れ動く心の滓

引き摺りたくはないが
纏っていたい気はする
纏い続けていたい気はする

(2000.2.16)

松かさ

うすあおい街灯に照らされ

冬を予告する風の中

芝生の上に散りばめられた松かさを拾う

行方知れぬものたちは松かさの影に潜むか、と

僕は松かさの中に種子を探すが

既にそれは、残らず運び去られていた

温かい陽光が育んだものなれば

帰るところ、再生するところへもまた、

眠りの中に原初の記憶をたどればよいであろう

ならばこの松かさの抜け殻を持ちかえり

僕はその中で憩うこととしようか

ひそかに冬を越すこととしようか

(2000.10.18)